

高久駅の歴史に触れて

町のJR駅シリーズ Vol.1

JR 高久駅
Takahu Station

町内にはJR東北本線が通っており、通勤や通学、買い物や通院などのために利用されています。

町のJR駅シリーズでは全3回にわたり、多くの人々が関わって続いてきた「駅」のさまざまな歴史についてご紹介します。

高久駅の歴史

高久駅が誕生する以前、その場所には、大正3年に開設された「高久信号場(信号所)」がありました。

この信号場は、単線区間において列車の行き違いのために設けられた施設で、黒磯駅と黒田原駅の区間が非常に長かったことから信号場が設置され、乗客は乗降することができませんでした。

それから50年経ち、昭和39年に、旅客扱いの「駅」として正式に

昇格したのが「高久駅」の始まりです。

20年間にわたり高久駅に勤務し、助役で退職した平山徳治さん(高久)に当時の話を聞くと、駅昇格を目指し、多くの方が署名運動を行い、十数年かけて陳情を続けたそうです。

「駅」への昇格は、初代益子仁助町長から三代目にあたる笹沼賢弥町長に至りようやく実を結んだものでした。

駅の安全を守る活動が続いています

その後、駅は昭和60年に無人化され、乗車駅証明書発行機が設置されています。1日の平均乗車人数はわずかながらも、地域の生活には欠かせない交通起点となっています。

高久巻江さん(本郷)は、平成24年4月から、高久駅の名誉駅長として地域に愛される駅づくりに取り組んでいます。名誉駅長として活動を始めて現在7年目で、鉄道OB会の支部会員の協力や黒磯駅社員とともに駅舎の清掃、構内の草刈り等を行っています。



▲高久巻江さん

名誉駅長とは

JR東日本では、地域に密着した駅づくりを目的として、無人駅に「名誉駅長」を配置しています。JRを退職した人が委嘱され、鉄道における経験を生かしてボランティア活動をしています。



▲旅客駅への昇格は当時の「広報大那須」でも大きく取り上げられました